

# ドイツの道に新たな風

マルブルクでの雅楽公演は、天理雅楽ヨーロッパ公演、天理大学雅楽部海外公演に続いて3回目。開演に先立ち、マルブルク大学のバベット・シモン副学長があいさつした（10月28日）

本教とドイツとの関わりは、半世紀前にさかのぼる。中山正善・二代真柱様が「国際宗教学宗教史会議」に出席された際、マルブルク大学の教授らと親交を深められたことを端緒に、以後「天理教展覧会」の開催、天理大学と同大学の人材交流などを通して友好関係を深めてきた。こうした歴史を踏まえ、今回、河原町大教会（深谷善太郎会長）はケルン市を拠点として雅楽公演を企画。その中で、京都とケルン両市の後援と、現地教友の全面的な協力を受けて当初の公演予定を拡大。10月27日から11月9日にかけて、ドイツ3カ所、オランダ1カ所で「テネリ」の名のもとに雅楽を通じての文化交流を展開、各地で賞賛を浴びた。（6面に関連記事）

## 天理河原町雅楽会

# 半世紀の交流の歩み 雅楽公演として実現

ケルン市には、河原町大教会が文化交流を目的に2006年に設立した「天理日独文化工房」がある。代表の志水美郎さん（43歳・ケルン布教所長）がケルン大学音楽部

文化支援活動の一環として企画。その中で、同大教会のある京都市とケルン市が姉妹都市という関係から、ケルン市の招聘を受け、京都市の後援のもと、民間外交使節として京都市長のメッセージを携えて訪問することになった。

二代真柱様は約50年前の1960年、ドイツのマルブルク・フィリップス大で開かれた第10回「国際宗教学宗教史会議」に出席。そのとき開会あいさつに立った同大学のフリードリヒ・ハイラー教授が、二代真柱様に謝辞を述べるひと幕があった。

実はその2年前、前回会議が東京で開催され、終了後、参加者25人は天理教の調査研究のために親里を訪問。二代真柱様は、各国を代表する宗教学者らに本教への理解を促されることも、心尽くしの歓待でねぎらわれた。

以後、マルブルク大学

・公演団团长（48歳・同大教会役員）は話す。

その後も天理大学と同大

妻・北里孝浩さん（日京分教会ようほく）とれいさん

この大聖堂でのコンサートは、ハーグ在住の音楽家夫妻・北里孝浩さん（日京分教会ようほく）とれいさん（同）が、同教会のオルガン奏者と懇意なことから実現。公演前から地元紙に予告記事が掲載されるなど、現地の関心の高さがうかがえた。

当日は、詰めかけた約500人の観客を前に、管絃、謡物のほか舞楽『蘭陵王』と『陪臚』を披露。普段はパイオルガンの演奏と聖歌隊の歌声が響く堂内は、雅やかな楽の音に包まれた。すべての演奏がやみ、一瞬の静寂の後、会場はあふれんばかりの拍手で満たされ、観客はさらにスタンディング・オベーションで演奏者を称えた。

一行はこの後、ドイツ・デュッセルドルフと、ケルン大学で公演を実施した。（文＝北村讓英記者）



河原町の一行は、ドイツ・ケルン市長を表敬訪問。市の公式行事のみ使用される「ハンザ・ザール」で舞楽を披露した（4日）

「私たちの予想しないところで次々と話が進んでいった。かつて二代真柱様が蒔かれた種が、親神様・教祖、そして歴代真柱様をはじめ数多くの先輩先生方の丹精

一行25人は「天理河原町雅楽会」として10月27日、日本を出発。翌28日には早速、マルブルク城で公演を開催した。

観客を前に、管絃の平調『越殿楽』、謡物『更衣』、そして舞楽『納曾利』と『胡飲酒』を披露した。会場の最前列には、「天理教展覧会」以降、本教とつながりの深いマルティン・クライツ博士（76歳・文

「この地で雅楽が演

奏されるのは3回目（88年・天理雅楽ヨーロッパ公演、95年・天理大学雅楽部海外公演）とあって、今回は雅楽の知識を持つ観客が少なからずいたのではないかと、もちろん、私もその一人。今後こうした文化交流や大学間の教授レベルの交流を通じて、天理とマルブルクの良好な関係が続いていくことを祈ってやまない」と感想を述べた。

31日には、オランダ・アイントホーフエンのセント・カタリーナ教会で公演。

この大聖堂でのコンサートは、ハーグ在住の音楽家夫妻・北里孝浩さん（日京分教会ようほく）とれいさん（同）が、同教会のオルガン奏者と懇意なことから実現。公演前から地元紙に予告記事が掲載されるなど、現地の関心の高さがうかがえた。

当日は、詰めかけた約500人の観客を前に、管絃、謡物のほか舞楽『蘭陵王』と『陪臚』を披露。普段はパイオルガンの演奏と聖歌隊の歌声が響く堂内は、雅やかな楽の音に包まれた。すべての演奏がやみ、一瞬の静寂の後、会場はあふれんばかりの拍手で満たされ、観客はさらにスタンディング・オベーションで演奏者を称えた。

一行はこの後、ドイツ・デュッセルドルフと、ケルン大学で公演を実施した。（文＝北村讓英記者）





## 工房の誕生はうれしい出来事

★ローベルト・ギュンターさん（80歳）  
ケルン大学名誉教授

私はこれまでに全13巻の日本音楽に関する著書の出版、ラジオ番組での民族音楽の紹介などを行ってきた。これは「公共」に対する私の奉仕といっても過言ではない。そんな私にとって、天理日独文化工房の誕生は、大変興味深

く、うれしい出来事だ。天理の教えについては、まだ語るほどの深い知識を持ち合わせてはいないが、世界の人々がたすけ合って陽気に暮らす世の中を目指し、ドイツと日本の文化の懸け橋になろうという工房の設立趣旨に賛同して、理事を引き受けた。今後の活動に大いに期待している。



## 独日の文化学び合う場に賛同

★フランツィスカ・エームケさん（62歳）  
ケルン大学日本学主任教授

3年前から、オーストリアのグラーツにあるエッゲンベルグ城で見つかった豊臣秀吉時代の大阪城を描いた屏風の研究を続けている。その様子が最近、日本のNHKでも取り上げられた。私は常々、日本史の研究には宗教や芸術を学ぶことが欠かせないと考えている。ドイツと日本の双方の文化を

互いに学び合う場を提供したいとする工房の趣旨に賛同して、私も理事の一人に加えていただいている。かつて天理を訪れたとき、あの巨大な本部神殿が信者の皆さんの浄財で建てられたと聞き、大変感激した。ケルン大聖堂は王や富裕層の財によって建てられたもの。でも、天理はそうではない。またぜひ、天理を訪ねたいと思っている。



## 「本物」の素晴らしさは伝わる

★カールハインツ・マイトさん（69歳）  
ケルン独日協会会長

ヨーロッパでは、英語の表現をそのまま受け入れて、アジアのことを極東、つまり「遠い東」という。私はそうではなく、アジアは「近い東」であることをあらゆる機会を通じてドイツの人々に訴えてきた。それゆえ、この地に天理日独

文化工房が設立され、共に活動できることを非常にうれしく思う。今回の雅楽コンサートにおいても、ケルンの人々が大変喜んでくれたことは、わが事のようにうれしい。文化は異なっても、「本物」の素晴らしさは伝わるということ、あらためて感じさせられた。

オランダ・アイントホーフェンでは、同市のセント・カタリーナ教会大聖堂で公演。堂内に雅やかな音が響いた（10月31日）



# 4会場 で1千300人 来場 ケルン市長表敬訪問も



一行は民間外交使節として、ケルン市長を表敬訪問。深谷団長がバーク市市長に京都市市長からのメッセージを手渡した（4日）

## 雅楽公演 各地で賞賛



ケルン大学の公演には350人が来場。終演後、演奏者は3度のカーテンコールを受けた（8日）

ケルン大学でのコンサート前日には、ワークショップを開催。参加者からは「曲に感情移入するの」といった質問も飛び出した（7日）

天理日独文化工房は、文化交流を通して両国の人々が互いに心を通わす場となることを目指している



文化工房でのワークショップは、日ごろ雅楽に親しむケルン大学の学生にとっても貴重な学びの機会となった



ドイツ・デュッセルドルフでの公演は、現地教友の清水勲さん（69歳・瑞祥分教会ようぼく）の尽力で実現。「恵光日本文化センター」を会場に、在デュッセルドルフ日本国総領事館の後援を受けて実施された（5日）



ドイツはクラシック音楽の本場。音楽に対する人々の評価は厳しい。たとえ異なる文化の音楽でも、それだけの理由で賞賛することはない。「天理河原町雅楽会」は10月27日から2週間、マールブルクを皮切りに、オランダ・アイントホーフェン、ドイツ・デュッセルドルフ、ケルンで雅楽公演を実施。耳の肥えた人々を前に堂々の演奏と舞を披露し、各地で賞賛を浴びた。4会場を訪れた観客の数は、合わせて1千300人上った。また11月4日には、京都市の民間外交使節として、ケルン市長を表敬訪問した。

案内された旧市役所建物の一室「ハンザ・ザール」は、公式行事のみ使用される「市の応接間」。まず、ハンスベルナー・バーチュ市長から歓迎のあいさつがあり、これに心えて、一行が舞楽「蘭陵王」を披露。続いて、深谷源洋団長が京都市市長のメッセージを読み上げ、バーチュ市長へ手渡した。「私たちがとって最も重要なこの場所で、日本の伝統的な音楽が演じられたことは意義深い。工房には、今後もこのような実りある文化交流の推進を期待する」バーチュ市長は、今回の表敬訪問についてこのようにコメント。会場には、地元テレビ局や新聞記者も駆けつけた。一行は期間中、コンサートのない日は、ケルン市内の天理日独文化工房でワークショップを開き、雅楽を専攻するケルン大学の学生らと交流を深めた。